

札幌にて開催された第 120 回日本精神神経学会学術総会

河西 千秋 Chiaki Kawanishi

第 120 回日本精神神経学会学術総会会長
札幌医科大学医学部神経精神医学講座

2024 年 6 月 20 日から 22 日の会期で札幌市にて開催された、第 120 回学術総会について、総会長の立場からご報告いたします。

第 120 回学術総会は、かなり前から札幌市における開催が内定していました。精神科専門医制度発足以降、学術総会参加者が激増したことから大都市・大規模会場持ち回りの開催となり、2024 年は北日本地域（東北地方、北海道内）、かつ北海道での開催が内定していました。道内関係者は、道内在職会員が総会長を務めることを待望していたのですが、関係諸氏にそれぞれのご事情があり、最終的に著者が学術総会会長候補として立候補することとなり、2021 年度の代議員総会で選出していただきました。当時、まだ著者は道内に着任して 6 年を過ぎた程度であり、経験不足などを含めて著者が任を負うことに懸念を感じる方もおられたようですが、当の本人も立候補を検討した段階からだならぬ緊張感でいっぱいでした。かつて、使命感から、闇雲に International Association for Suicide Prevention の 2016 年学術総会を東京に誘致し、事務局長として準備・運営全般を担った経験がありますが、そのときと比べると、日本精神神経学会の伝統と、数多の学会役員諸氏、および学会事務局への信頼感から、何とか形にはしていけるだろうとの思いはありました。

一方で、学術総会スローガンの設定は、すぐに、「真に役立つ精神医学」というスローガンが頭に浮かび、理事会の承認を得てすんなり決まりました。臨床医学領域で学術活動に携わる皆様の多くは、日常診療においてどうしても乗り越えることができない課題に対して研究を実施し、ある

いは大切な知見を検証したり普及したいという思いで学術にかかわっておられることと思います。そして、それは患者さんをはじめとする当事者の苦悩というものがあつてのことだと思います。著者が注力している自殺予防対策の仕事においては、真に役立つことをしなければ意味を為さないばかりか、命の問題に直結します。折しも、2020 年初頭からの COVID-19 感染拡大、そして間髪入れずに欧州、中東では戦争が勃発し、不安要素ばかりの世情が続いていましたし、今もその状況は変わりません。この間、日本人のメンタルヘルスの状況に関するいくつもの指標が悪化しています。ここにおいて、精神医学・精神医療のプレゼンスや有用性が真に求められるところとなっています。

さて、大会スローガンが単にお飾りにならないように、一般演題公募、シンポジウム提案、そしてワークショップ提案に際して、「大会スローガンをふまえての演題応募登録を」と大会ホームページ上で公示しました。また、演題査読担当の先生にも、査読のスコアリング要素として、「真に役立つ」に該当するか否かを検討していただきました。このような総会長のいささか変わった指示出しにもかかわらず、結果的には、過去最高水準の演題応募があり、査読の結果、一般演題 411 題、委員会シンポジウム 30 題、一般シンポジウム 102 題、そして、ワークショップ 10 題が最終的に採択されました。これに、恒例の海外の研究者による特別講演 2 題、学術総会会長講演、教育講演 6 題、「先達に聴く」3 題、そして市民公開講座が加わりましたが、これらの演題の査読プロセスが終了に近づいたタイミングで急遽、「能登地震の現状と支援状況・課題に関する緊急

✉ E mail : chiaki.kawanishi@gmail.com

受付日 : 2025 年 2 月 7 日

受理日 : 2025 年 4 月 1 日

doi : 10.57369/pnj.25-092

シンポジウム」を企画し、理事会の承認を得て特別に開催することとしました。通常の演題確定プロセスを超えて開催できたのは、学会災害支援委員会の大塚耕太郎先生と富田博秋先生のご協力、そして何と云いまでも被災地から登壇された皆様のご苦勞の賜物でしたが、令和6年能登半島地震発生直後に開催されたこの第120回学術総会において、この企画はどうしても実現しなければなりませんでした。

参加登録者数は約9,780名と過去最大数となりました。また、4,500名をも超える方が現地で学術総会に参加しました。現地参加者数は、最北の島である北海道での開催という条件を考慮すると予想以上の数でしたが、これはCOVID-19問題の緩和により、多くの方々が前年、比較的利便性の高い首都圏で開催された第119回学術総会（伊豫雅臣総会長）に安心して参加され、充実感が得られたことが一部影響したのではないかと推察しています。今回は、加えて関係各位のご協力により第120回学術総会ならではの素晴らしいプログラムを組むことができたことで、「遠出してでも学術総会に参加をしたい」となったのかもしれない。

現地開催終了後には、前学術総会に引き続き今回もオンデマンド配信を行いました。現地参加・不参加にかかわらず、本誌読者各位は数多くの演題を視聴したと思いますので、演題タイトルの紹介や内容に関する解説はここでは割愛しますが、著者が企画したものについて補足をしたいと思います。特別講演のコペンハーゲン大学・ノルデントフト教授は、自殺予防学の泰斗ともいえるべき存在ですが、そのような立場の研究者が真正面から自殺予防に関する特別講演を行ったのは、学術総会の歴史のなかではじめてのことだったと思います。ただ、ノルデントフト教授は、「Psychiatry and suicide prevention」の演題名を掲げ、自殺予防における数々のトピックスを平易な表現で紹介され、視聴者は、精神医学と自殺の関係性や、自殺が予防可能であることを示す実践活動について、非常に関心をもって学ぶことができたことと思います。この特別講演の開演と終演に際しては、タクソ・イエセン駐日デンマーク王国大使（学術総会後に離任されたので現時点では前大使）がそれぞれ緒言とエピローグを語りました。大使は、デンマーク王国がライフサイエンス領域に注力しており、酪農王国とされているデンマークから日本への輸出において、実は輸出額の40%がライフサイエンス領域に関連していることを語り、そして精神疾患の有病率の高さをふまえて、デン

マーク王国がメンタルヘルスに関して重点施策を展開していることについて提示し、具体的な取り組み事例としてデジタル精神医学やアンチスティグマ対策などを例示しました。駐日大使の登壇という事例は、学術総会において前例がないとお聞きしています。

また、会長企画シンポジウム、「都道府県及び市町村における自殺対策のイニシアチブ」では、地域自殺対策に注力する首長の方々に登壇していただきましたが、複数の首長のシンポジスト登壇というのも、学術総会の歴史において前例がないとのことでした。予定されていた岩手県・達増拓也知事におかれましては、直前に代理者登壇となりましたが、山梨県・長崎幸太郎知事と北海道別海町・曾根興三町長が登壇し、それぞれの地域における地域自殺対策の背景や、取り組み内容、そして首長としての思いや取り組みの意義について切々と語られ、著者が感想をお聴きした範囲では、多くの視聴者に強い印象を与えたようでした。社会や地域の精神保健の課題は、診察での診療のみで解決できません。地域を治める政治家であり、地方公共団体のリーダーであり、利害関係調整者であり、そして地域住民の代表でもある首長の直接的な関与は、課題解決にとって大きな力となります。また、首長の方々と著者ら学会との交流は、首長の方々に精神医学・精神医療の価値と有用性を理解いただくうえで最良の場となります。なお、オンデマンド配信では、「教育講演：明日から実施可能な睡眠・生活リズムの調整法」「教育講演：大人のADHDをめぐって」「一般シンポジウム：市販薬乱用・依存の実態・治療・対策」「一般シンポジウム：プロフェッショナルな薬物療法を目指して」「教育講演：Prodromal期のレビー小体型認知症における精神症状の特徴と治療のポイント」「教育講演：Complex PTSD」「一般シンポジウム：精神科医・産業医の意見申述」、そして学術総会長講演（図1）（以上、順不同）をはじめとする20もの演題について、1,000回を超える視聴数がありました。

市民公開講座は、最終日の土曜午後に企画されたことから、会員の参加は限られたようなので、ここで少し紹介をします。講師は、「市民向けにわかりやすい内容を」という視点で人選し、スキーマの純ジャンプ選手であり冬季オリンピックやワールドカップ出場記録を含めて「レジェンド」の愛称で知られる、葛西紀明氏に講演を依頼しました。葛西氏は、ご自身の生い立ちや、ジャンパーとして大成されるまでのさまざまな苦勞について話をされ、また、家族や信頼する仲間への思いについて語られました（図2）。こ



図1 第1会場で行われた学術総会長特別公演



図2 市民公開講座で講演をする葛西紀明氏

の講話で、著者らは葛西氏の強さを再認識しましたが、それだけでなく、夢と希望をもつことと、それを達成するための目標をもつことの大切さを学び、家族や周囲の人との絆を大切にするその姿勢から多くのことを学びました。葛西氏は、獲得した複数のオリンピック・メダルを会場内で回覧し、参加者は実際にそれらを手に取り、触れながら講話を拝聴しましたが、子どもたちが輝くような笑顔でメダルを手に取り、壇上の葛西氏を凝視する様子が、著者にはとても印象的でした。

著者らは、会場の利便性の確保と向上、および Hospitality にも気を配りました。会場は、札幌市街地にあるとはいえ、繁華街からは少し外れた場所ということで、最寄り駅からシャトルバスを運行させました。また、キッチンカーを集め、規定の許す範囲で、会場内で当事者の制作したものや北海道内の風物を感じてもらえるような品物の購入もできるように工夫をしました。

おびただしい数の演題の発表は、17会場を用いたパラレル・セッションとポスター会場の計18会場で実施されましたが、会場のサイズとしては、ちょうど収まるような規模であり、手狭でもなく、無駄に移動距離が長いということもなかったかと思います。ただし、ポスター会場の空調管理が低調で、暑気にあたってしまった参加者もおられたようでした。札幌開催といえども温暖化問題からは逃れることはできませんでした。

欧州の学会では、しばしば学会のオープニングや合間に、演奏や本格的なコンサートが開催され、それは、単なる余興ではなく、当地の文化を知り、参加者相互の交流を促すことにつながります。著者らもそのことを重視して、



図3 市川映子氏率いる弦楽合奏団の演奏とともに開幕した懇親会

札幌交響楽団に依頼し、楽団OB・OGを含む弦楽合奏団に出演交渉を行い、懇親会において演奏をしていただきました(図3)。楽曲解説は著者が執筆しました。演奏のクオリティが高かったこともあり、この企画は非常に好評であったとお聞きしています。

第120回学術総会のあらゆる準備について、三村将理事長をはじめとする理事の皆様、学会学術総会企画委員会委員の皆様、北海道・東北地区の諸先生に特にご助力をいただきました。対応の仕方がわからないものや、細々とした案件については、第119回学術総会の伊豫雅臣学術総会長と新津富央運営委員長にご親切に教えていただきました。準備、当日運営の詳細については、学会事務局の皆様と運営委託会社のコンベンションリンケージ社の皆様にご依頼

世話になりました。当該学術総会に限らず、一般に全国規模の学術総会を開催すると、その主宰教室（診療科）がひどく疲弊するといわれたものでしたが、著者の所属の札幌医科大学医学部神経精神医学講座は元より規模がさほど大きいわけではなく、また、平素より広大な北海道内の地域医療や地域保健活動に注力しており余裕があるわけではないことから、余程の工夫を加えなければ、日本精神神経学会学術総会を主宰できるわけがありませんでした。そこで、学術総会を担うことが決まった当時から、学術総会長である著者と、事務局長（田所重紀先生）、事務局長補佐兼教室長（柏木智則先生）の3名で、とりあえず3名だけでできる限りの準備をすること、そのためには極力、無駄を省いて合理性を追求することとし、週1回の朝の30分ミーティングと月に約一度の運営会社とのミーティングにより粛々と課題に対処していきました。準備段階で3名の枠を超えて教室員に業務をお願いしたことといえば、応募演題の査読と学術総会開催直前の現地参加者への対応くらいでした。人は追い込まれると窮するのが常ですが、今回は、比較的余裕をもって学術総会の全体像や企画について推敲することができたことから、ユニークなプログラムや企画、各種の工夫を案出することが可能となりました。

著者の所属のスタッフからすれば、北日本地域開催、かつ北海道内開催、そして、さらに所属が関係する学術総会に遭遇する機会は、職業人生で一度あるかないかという稀



図4 学術総会の準備、運営、演題発表を終えた札幌医科大学医学部神経精神医学講座のスタッフ

少なものです。著者らの教室では、多くのスタッフが臨床研究に取り組み、20前後のテーマ別研究が常に稼働していますが、これを機に多くの所属スタッフが勇んで演題を応募し、幸い発表の機会をいただいたことは非常に貴重な体験となったことと思います（図4）。最後に、この学術総会に参加したすべての人にとって何らかのポジティブな体験が得られたなら幸いですし、多くの学術総会参加者が、折に触れ、また「真に役立つ精神医学」を思い、あるいは再考してもらうことができればと願っています。